

走ることの理由

いとう あつりのり
伊藤 敦規

民博 研究戦略センター

低酸素濃度の高地が培う身体能力

ロンドン・オリンピック開幕二ヶ月前、米国アリゾナ州フラッグスタッフで強化合宿中のマラソン日本女子代表選手に出会った。ここは競泳日本代表の合宿先としても知られている。治安と交通の便の良さ、高地砂漠気候による晴天日の多さと昼夜の寒暖のメリハリ、そして標高二一〇〇メートルという立地が、スポーツ選手の身体能力強化に適した土地なのだろう。

では、低酸素濃度の高地に暮らしている人たちの身体能力はどうだろうか。フラッグスタッフの人口の一割近くを占めるのが先住民で、先住民ホビの保留地はここから一五〇キロメートル離れた標高一八〇〇メートル地点に位置する。村落の住居から崖の下の畑までの距離は、もつとも近くても数キロメートルはある。移動手段は今でこそ自動車だが、一昔前までは徒歩や駆け足だった。炎天下での長時間にわたる農作業、断食を伴う儀礼的ダンスやその練習を数日間にわたって遂行する強靱な体力に筆者はいつも驚かされる。

一〇〇年前のことだが、ホビはオリンピック選手を輩出した。男子陸上の米国代表になったルイス・テワニマは、一九〇八年のロンドン大会のマラソンで九位入賞、

一九二二年のストックホルム大会の一万メートルで銀メダル獲得という偉業をなした。現在でもホビ高校には、クルスカントリーや中長距離競技の全米上位クラスの選手が男女ともにゴロゴロいて選手層が厚い。陸上競技選手としての資質と身体能力は高いように感じられる。



ルイス・テワニマ記念マラソン大会で配付されるTシャツ

健康と儀礼のために

保留地内には糖尿病予防のための「二〇〇マイル(約二六〇キロメートル)走破クラブ」というマラソン組織もある。参加登録は五歳からなので、老若男女が早朝や夕方に路側を走ったり歩いたりする姿をよく目にする。興味深いのは、ランナーとすれ違う車から発せられる「ありがとう!」という声だ。ホビの友人は「走るとは、単なるスポーツや生活習慣病予防やひとりの時間を楽しむことじゃないんだ。乾燥したこの地に雨雲を呼び寄せる農耕儀礼の一環なんだよ。だからランナーに感謝の意をあらわしているのさ」と説明してくれた。今春民博で開催した研究公演『ホビの踊りと音楽』に参加して、演者の怡幅の良さを目の当たりにした方々はにわかには信じられないかもしれないが、保留地では今日も地を駆ける音と「ありがとう!」の言葉が響いていることだろう。